

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 5 日現在

機関番号：24701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23593252

研究課題名(和文)造血幹細胞移植患者を支えたサポートと療養体験の意味づけに関する研究

研究課題名(英文) Research on the Meaning which Hematopoietic Stem Cell Transplant Patients Give to the Support Offering Consolation to Them and to Their Own Experience of Medical Treatment

研究代表者

山口 昌子 (YAMAGUCHI, MASAKO)

和歌山県立医科大学・保健看護学部・助教

研究者番号：00554536

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円、(間接経費) 390,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、造血器がん患者が造血幹細胞移植を受け、その療養体験で支えになったサポートや自らの療養体験をどのように意味づけしているかを明らかにすることを目的とし、半構造化面接による調査を行い、患者の主観的体験を質的帰納的に分析した。結果、【治療への期待】、【安心して治療を受けられる環境】、【周囲の人の励まし】、【ドナーへの感謝】、【家族の存在】、【治癒のイメージを持つ】、【同病者の姿】が療養体験における支えとして見出された。以上のことから、身体的苦痛の緩和のみならず、心理面を支える看護の重要性と、移植後の生活の再構築に向けた支援、患者自らが病いの意味を見出していける支援の必要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to clarify how hematopoietic cancer patients who receive hematopoietic stem cell transplants give meaning to the support which offered consolation to them. For this purpose, we conducted semi-structured interviews with them and analyzed their subjective experience inductively. Our analysis extracted seven categories as a consolation during the medical treatment: expectations for cure, the environment which can receive medical treatment at ease, encouragement by those around a patient, gratitude to a donor, family members' presence, having the image of recovery, and the appearance of those who have the same disease. These categories suggested the importance of not only the relief of physical pain, but also nursing which supports mental aspects of patients. They also suggested that it was necessary for us to support their attempts to reconstruct their own lives after transplantation and to find out the significance of disease by themselves.

研究分野：医歯薬

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：がん看護学 造血幹細胞移植

1. 研究開始当初の背景

造血幹細胞移植(以下、移植)は、2008年に全国で3000件前後実施され¹⁾、造血器がんに対して標準的な治療方法として確立され、移植患者は年々増加している。一方、この治療の過程において患者が受ける身体的、心理的、社会的侵襲は大きく、同種移植後に特異的に起こる症状には、拒絶反応、移植片対宿主病(以後、GVHD)がある。さらに、治療関連障害、感染症などの身体症状の強い合併症が多数存在する。このような合併症に対して患者は、移植後の生活においても長期間にわたる管理が必要で、継続した看護支援は不可欠である。造血幹細胞移植患者に関する先行研究において、移植患者の Quality of Life (QOL) についての多数報告がある。なかでも同種移植後の GVHD などの身体的症状がある場合に患者の QOL は低く、それは心理社会的状況にも影響するとされている。以上のことから、移植後の患者の直面する諸問題を多角的に捉え、長期的な視点で療養生活を支援することが必要であると考え。また、患者は自らの移植の体験を否定的な出来事と限って捉えているのではなく、移植を自己の成長体験とし、移植によって新しい自分や生き方との出会い、他者との絆、感謝の気持ちを感じており、治療を乗り越えたことで肯定的に捉えていることも報告されている²⁾。したがって、このような観点から移植患者についてさらに明らかにしていくこと、また、それに伴う看護支援も今後ますます必要とされると考える。

がん看護において、がん患者がその体験に意味を見出すことに向けた支援に注目され、その必要性も報告されている³⁾。患者が自らのがん体験に意味づけをおこなうことが出来たとき、苦難を乗り越えて病とともに歩む生き方をつかみ、その後の生き方にも強い影響をもたらすものと考えられている。

近年、がんの診断や治療の技術が発展し、

がんを体験しながら長期に生存する人々が増え、がんは慢性疾患として捉えられるようになった。移植患者においても、治療の進歩により、長期生存が可能となった。長期にわたる移植後の療養管理の観点からも、移植を乗り越えて病とともに歩む生き方、自らの移植の体験に意味を見出すことへの支援は不可欠であるといえよう。以上のようなことから、がん看護に対するこれからの方向性を踏まえて、また、移植患者の自らの語りを通じた知識の蓄積が、今後の看護介入への示唆を与えるものと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、造血器がん患者が造血幹細胞移植を受け、その療養体験の経過の中で支えになったサポートや自らの療養体験をどのように意味づけしているかを明らかにすることを目的としている。具体的な研究項目は、造血幹細胞移植患者がその療養体験の経過の中で患者自らを支えたサポート(支えられたと感じる出来事・人・物・情報)が何であったかを明らかにする。患者は自らの療養体験をどのように意味づけしているのかを明らかにする。以上のことから、具体的に実現可能な看護支援の検討を行う。患者が療養体験の経過から自分なりの意味を見出していくことが、その後の患者にどのような影響があるのかを検討を行う。

3. 研究の方法

半構造化面接法によりインタビュー調査を行う。患者の語りから逐語録を作成し、患者の主観的体験を質的帰納的に分析した。

(1) 研究参加者

研究参加者は、造血器がん患者で造血幹細胞移植を受けた30歳~65歳(成人期)で意思疎通に問題がなく、1回30~60分程度のインタビュー調査が可能で、移植後の回復過程にある本研究の趣旨を理解し協力が得られる者とした。

リクルート方法：研究参加者の選定には、患者がインタビュー調査に耐えうる身体的・心理的状态にあることが前提となるため、本研究協力施設のがん看護の臨床経験者の協力体制のもとに行った。研究参加の意思が確認された者に対して、研究者より文書及び口頭にて研究の主旨と目的、方法などについての説明を行い、自由意志により参加の意思を確認して、同意書への署名を得た。面接日時と時間帯は、参加者の都合を優先して決定した。

研究参加者総数5名中、インタビュー調査を3回実施した人は2名で、2回実施した人は2名、1回実施した人は1名であった。年齢は、20代後半～40代後半であった。性別は、男性2名、女性3名であった。診断名は、悪性リンパ腫2名、急性リンパ性白血病2名、急性骨髄性白血病1名であった。

(2) データ収集

データ収集の場所は、研究協力施設のプライベートが保てる外来の個室面談室で行った。1回のインタビューは20分～52分であった。インタビューの内容は、研究参加者の同意を得てICレコーダーに録音し、一部メモに残した。インタビューは、参加者の身体的・心理的負担感や体調の変化に留意して行った。

(3) 分析方法

- 1) 逐語録を繰り返し読み起こし、文脈ごとに分類し、移植後の経過の中で支えになったサポートと療養体験の意味に関する表現を抜き出し、コード化する。(分析1)
- 2) 本人にとって支えになったサポートと療養体験の意味を見出すため、本人の認識・内的視点で表現する。(分析2)
- 3) 意味内容が類似するものの集合体を作り、その集合体に名称をつける(分析3)
- 4) 事例毎に比較し、類似性や相違性について注意深く検討し、カテゴリーを抽出する。
- 5) 再度、逐語録を読み返し、記述された参加者の支えになったサポートと療養体験の

意味が適切に示されているかを確認する。分析の全過程においては質的研究の経験者である研究者からスーパーヴァイズを受けた。分析過程では、研究分担者と結果を検討して確証性の確保を行った。

本研究は、和歌山県立医科大学研究倫理審査委員会による承諾を得て行った。

4. 研究成果

(1) 造血幹細胞移植患者が療養体験の経過で患者自らを支えたサポート(支えられたと感じる出来事・人・物・情報)の明確化

造血器腫瘍と診断を受けた患者は、突然の発症に驚き、衝撃を受けていた。そのなかで、発症から移植治療中において患者の支えと感じた事柄として、【治療への期待】【安心して治療を受けられる環境】【周囲の人の励まし】【ドナーへの感謝】【家族の存在】【治療のイメージを持つ】【同病者の姿】の7つのカテゴリーと、21のサブカテゴリーが見出された。

カテゴリー：

【治療への期待】

病名を告げられ患者は、驚きと衝撃を受ける。その後、医師から移植の説明を受けるなかで、移植に迷いはない まだ頑張れる 移植の成功に望みを賭ける という、これから行われる治療への期待を持つようになる。

【安心して治療を受けられる環境】

移植治療に向かう過程では、移植準備が早急に整えられる。前処置の抗がん剤の副作用出現で苦しむことになるが、医師に任せること、医師と看護師の協力によって、治療に専念できる環境があった。移植中に過ごす無菌室生活では、身体的・精神的に耐えがたい苦しみに見舞われるなか、看護師との普通の会話 看護師の訪室 が、患者の日常を支えていた。

【周囲の人の励まし】

無菌室での治療中は、身体的・精神的に耐えがたい苦しみに見舞われ、閉ざされた生活環境におかれる患者は、看護師からの励ましの言葉がけ 医師からの励ましの言葉がけ と、友人からのメール といった周囲の人の励ましがあつたから、乗り越えられたと語った。

【家族の存在】

移植治療を乗り越えるには、家族がそばにいてくれた こと、移植によって引き起こされる外見の変化、脱毛や皮膚に現れる症状について 家族のユーモア によって救われたと語った。子を持つ親である患者は、子どもの成長を見届けたい という思いがあつた。

【ドナーへの感謝】

急性 GVHD の様々な症状出現による苦痛に対して 姉の細胞が戦ってくれている といったドナーへの感謝の思いや 会ってお礼を言いたい ドナーが早く見つかって嬉しい というドナーが見つかったことから、移植治療を受けることができたという感謝の思いがあつた。

【治癒のイメージを持つ】

移植治療中の患者は、身体的ダメージの大きさから先の見通しへの不安を感じながらも、治ることだけを考える 治ってくるたびに頑張ろうと考える 逃げないで進む という前向きな気持ちを維持しようとしていた。さらに、脱毛といった外見の変化について、女性患者からは自尊感情に大きく影響したことが語られた。そのなかで 自分の誇りを失わない という思いがあつた。

【同病者の姿】

無菌室生活は、周囲から疎外された生活環境ではあるが、同じ疾患や移植治療を受けた同病者の姿から みんな頑張っている と語り、闘病への意欲を保っていた。

以上のことから、患者は、移植に迷いはない まだ頑張れる 移植の成功に望みを賭け

る といった、これから行われる【治療への期待】から前向きな思いを持つことで、移植治療に向かう自らを支えていた。移植治療は、医師に任せる 医師と看護師の協力 といった医療者への信頼と治療に専念できる環境、また、無菌室生活での 看護師との普通の会話 看護師の訪室 といったことが、【安心して治療を受けられる環境】となって、身体的・精神的に耐えがたい状況にある患者を支えていた。無菌室生活において患者は、精神的な束縛感と共に、身体的な不自由さを感じる⁴⁾。過酷な移植治療の最中、制限を余儀なくされる無菌室生活で看護師とする何気ない会話でのやり取りが、患者の日常を取り戻せたという思いにつながっていたといえる。看護師の励ましの言葉がけ 医師からの励ましの言葉がけ 友人からのメール などの【周囲の人の励まし】といった医療者からの情緒的支援を得ること、メールによる友人とのつながりも患者の支えとなっていた。また、家族がそばにいてくれた 家族のユーモア といった家族とのコミュニケーションや家族からの支援と 子供の成長を見届けたい といった自ら将来への役割遂行の希望を抱く【家族の存在】も患者を支えていた。家族との面会は心の支えとなり、孤独感を軽減することが闘病意欲を維持させる⁶⁾。【家族の存在】は、先行研究と同様で移植治療中の支えであつた。姉の細胞が戦ってくれている 会ってお礼を言いたい ドナーが早く見つかって嬉しい と移植治療を受けることが出来たことへの【ドナーへの感謝】の思いが、治ることだけを考える 治ってくるたびに頑張ろうと考える と【治癒のイメージを持つ】との思いとなり、逃げないで進む 自分の誇りを失わない といった移植治療に伴う数々の苦難を乗り越えていきたいという強い思いにもつながっていったといえる。辛い治療は自分だけではなく みんな頑張っている という入院生活から垣間見る【同病者の姿】も患者を支えていた。

これらのことから、発症から移植治療中の看護実践として、突然の発症に衝撃を受けている患者の思いをくみ取り、移植治療を乗り越えていけるよう信頼関係を築き、情緒的支援を行う必要性の示唆が得られた。移植治療中は、限られた環境での生活となる。患者が発症前の日常に近いと感じられる環境調整と細やかな配慮が必要である。患者を支える家族のケアを行い、家族がその力を発揮できるように支援していく必要がある。

(2) 造血幹細胞移植患者自らの療養体験の意味づけに関する検討

個別事例：A氏 20代後半 男性 急性骨髄性白血病 allo-PBSCT

語られた内容から病いの経験の中心的テーマは、苦難からの自己成長の機会と解釈できた。中心的なテーマは、3つの時期【発症から治療開始】【移植治療中】【自宅生活の再開】とサブテーマ<病いの存在に驚きつつ治療に挑む>、<苦難の連続に耐え続ける>、<病いの苦難を捉え直す>によって構成されていた。

サブテーマ：

<病いの存在に驚きつつ治療に挑む>

A氏は、診断を受ける3か月ぐらい前から柔道とサッカーの試合中に、いつもよりも早いスタミナ切れといった身体の異変を知覚していた。その時はただの体力不足だと思い、毎日走ってトレーニングに励んでいた。その後、仕事に3階まで階段を上がる際にひどい息切れを感じ、近医を受診した。血液検査の結果、ヘモグロビン値と白血球値の異常を告げられ、直ちに大学病院への受診を勧められた。受診したその日に骨髄穿刺を受け、医師から「白血病かもわからないから調べます。早く治療しないといけないから、早く入院しよう」と説明を受けた。A氏は、「急にそんなこと(直ぐに入院を勧められた)になったのでびっくりしましたね。マジかよ…」と思

った」と診断を告げられた時のことを話した。移植治療を受ける決断については、「もう早く治療していただいたほうがいいと思って、移植治療に迷うことなかった」と話した。

<苦難の連続に耐え続ける>

allo-PBSCTの治療過程で行われる放射線照射、大量抗がん剤投与に伴い、数々の身体的ダメージを受けた。最初の試練は、白血球数が上がらないことによる無菌室生活が長引いたことであった。A氏にとって、この無菌室での閉ざされた空間と限られた人のみの接触を余儀なくされた生活は、孤独感や疎外感をもたらすものであった。そのなかで、接する機会の多い看護師との会話や励ましの言葉がけは、患者の苦難を支えることにつながっていった。また、移植後の合併症に対して「姉が戦ってくれている」と語り、ドナーへの感謝の気持ちが度重なる苦難に耐える力になっていた。その一方で、数々出現する身体的苦痛に耐えながら、「本当に治るのか」という不安と「治ることだけを考えるようにしていた」という、置かれている状態をなんとか前向きに捉えようとしていた。

<病いの苦難を捉え直す>

成人前期にあるA氏は、成人前期の発達課題を達成していく過程にあるが、突然の急性骨髄性白血病の発症で、慣れ親しんだ職業や社会生活から遠のくこととなり、発達課題である親密さとは裏腹に孤立の状況に置かれることとなった。治療上やむなく強いられる生活環境は、発達課題を阻害する状況といえる。しかし、A氏は、このつらい移植治療を支えてくれたのは、家族、友人、職場の人といった周囲の人々の励ましがあつたからと話し、治療過程を振り返ることによって、家族の大切さを感じ、周囲の人やすべてに感謝できるようになったと語る。A氏は、自らが過酷な治療を乗り越えられたことを、「すべてに感謝」と表現し、「視線が変わった、視野が広がった」と語る。そのことは、allo-

PBSCT の経験を通しての人間的な成長をなし遂げていったといえる。つまり、A 氏の病いの経験は、苦難からの自己成長の機会と解釈でき、その経験は、肯定的に意味づけられようとしていると考える。

これらのことから、成人前期にある患者に対しては、特に就労の問題、結婚や子をもつといった発達課題への対応がとりわけ重要といえる。一人ひとりが納得し、その人らしく発達課題の問題を解決していけるような支援が必要である。具体的な方策としては、信頼関係の中で思いを表出できるような継続的なかわりが不可欠と考える。同じ経験も持つ人達との交流も有効と考える。

A 氏は、病いへの思いを、「からだの中から悪くなる、なにもできませんからね、自分では対応が... (中略)。自分の中で、いじめられている感じ...」と語った。allo- PBSCT を受けた人は、寛解すれば発症前の元の生活に戻れることが保障されているわけではなく、再発への不安、苦悩、生活上の問題など、一人で抱えることがないよう支援しながら、その上で、新たな人生のスタート、生活の再構築に向けて、自らが主体的に取り組めることを見つけいくことを支援することが必要である。人は自分らしく生きることに向かつて絶えず成長しようとするものである。看護師はその経験に耳を傾け、患者自らが病いの意味を見出しにいけるよう支援することが重要である。

<文献>

- 1)日本造血細胞移植学会：移植年度疾患別移植件数 表7 平成21年度全国調査報告書，<http://www.jshct.com/report/2009/>
- 2)石田和子、神田清子、白石美咲 他：造血幹細胞移植体験が生き方に与える影響と移植を乗り越えた要因の分析，*がん看護*，10(2)，171-177，2005
- 3)近藤まゆみ、嶺岸秀子 編：がんサバイバーシップ がんとともに生きる人びとへの

看護ケア，医歯薬出版，2009

4)村上摩利，安平絵美，佐保美恵子：無菌室入室患者の心理状況の変化，第35回日本看護学会論文集 - 成人看護 - ，385-360，2004

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計0件)

[学会発表](計3件)

山口昌子，辻あさみ，鈴木幸子．同種造血幹細胞移植を受けた皮膚悪性リンパ腫女性患者の再就業に至る過程，第28回日本がん看護学会学術集会，2014年2月9日(新潟)

山口昌子，塩路有理，辻あさみ，鈴木幸子．同種造血幹細胞移植を受けた患者の思い 発症から移植治療中の支え ，第44回日本看護学会 成人看護 学術集会，2013年10月25日(和歌山)

山口昌子，鈴木幸子．同種造血幹細胞移植を受けた20代後半男性患者の治療過程を支えた体験，第32回日本看護科学学会学術集会，2012年11月30日(東京)

6. 研究組織

(1)研究代表者

山口 昌子(MASAKO YAMAGUCHI)
和歌山県立医科大学・保健看護学部・助教
研究者番号：00554563

(2)研究分担者

鈴木 幸子(YUKIKO SUZUKI)
和歌山県立医科大学・保健看護学部・教授
研究者番号：60285319

辻 あさみ(ASAMI TUGHI)
和歌山県立医科大学・保健看護学部・講師
研究者番号：60310794